

方言敬語の語られ方と近代主義：
方言研究にみる近畿中心主義

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2020-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027097

方言敬語の語られ方と近代主義

方言研究にみる近畿中心主義

熊 谷 滋 子

1. はじめに

東北弁、もしくは東北方言といえば、かつて（今でも？）「ズーズー弁」として見下され、ドラマや娯楽番組、外国作品の翻訳などでは、いまだに田舎っぺや下層階級を連想させる粗野であか抜けないことばとして、その方言イメージが否定的なまま流通している（熊谷2017、2018、2019）。このようなメディアにおけるイメージがある一方で、アカデミズムの世界では東北方言はどのように位置づけられてきたのだろうか。今回、方言敬語について、方言研究が前提としてきた地域方言の位置づけ、つまり、西日本方言が上で東日本方言が下といった、いわば「西高東低」とみなす語り方を具体的に探してみたい。

小林・澤村（2014：169）『ものの言い方西東』では、発音や文法というよりも、言い方の奥にある発想法に地域差のあることに注目し、「近畿と東北の違いがはっきりと浮かび上がっている。どの発想法においても近畿は発達が著しく、東北は未発達の状態にある。この二つの地域は、言語的発想法から見たとき、発達と未発達の両極に位置する典型的な類型として把握することができる（ここで言う「発達」「未発達」が価値の優劣ではないことは、一言断わっておこう）」（下線は筆者）と主張し、発想法に地域差があるだけでなく、そこに一種の「発達」「未発達」の差があるということを論じている。

小林・澤村（2014）がやってたつ理論的支柱は、かつて都のあった奈良、京都もしくは近畿という中心地から周縁地域へことばが同心円状に伝播していくとする発想、つまり、柳田国男の方言圏論である。さらに、「発達」「未発達」というとらえ方は価値の優劣ではないと断っているものの、その語彙的意味からは、「未発達」とは発達途上であり、東日本が、時の経過とともに、いずれ西日本のように「発達」した段階に至るという発達史観が根底によめるのである。2000年代に入ってもこのようなある種の「近代的な」発想が根強くあることに

ついてあらためて考えてみたくなった。今回、方言研究の根底に脈々と受け継がれてきたこのような見方を、方言敬語を軸に、あちこち寄り道しながら解きほぐしてみたい。

断わっておくが、私自身、これまでの方言研究の蓄積と成果のおかげで方言敬語について考えてみたいと思えるようになったのであり、発想法に地域差があるという見方に大いに刺激を受けている。本稿では最低限であるが、特に方言敬語をめぐる語り方を中心に、先行研究をまとめながら、様々なとらえ方を整理をしていきたい。方言研究のありようについて、今後へのヒントが少しでも得られればという願いでまとめている。

2. 方言研究の前提

まず、方言研究はどのような前提、もしくは発想によって展開されてきたのかを確認したい。日本の歴史と国語問題について、特に、方言研究の動向を考察した安田敏朗（1999：21）の見解を以下に引用しよう。

「方言」には、「方言には古語が残る」として語られる「起源」へ遡る際に用いられるロマンティックなイメージと、近代国民国家の均質な空間を創出する上での阻害要因と見なされる「停滞」したイメージがある。（略）前者は「日本語」という総体の通時的・歴史的な構築を近代国民国家が行なっていく際に頻繁に語られ、後者は、国民国家の言語として共時的・普遍的に流通させていく際の障害として頻りに取りあげられていく。

今回取り上げる方言敬語とは、いうまでもなく方言で表現される敬語のことである。明治期、つまり標準語を制定した当時は、方言は非標準、劣るもの、矯正すべきものとして、安田のいう後者の意味あいが強く押し出され、その後、戦中、戦後では、日本の伝統文化を「国語」から称揚する際に、敬語をひきあいだし、標準語のみならず、方言における敬語が、前者のイメージで研究されてきたという経緯がある。日本古来の誇るべき伝統が敬語にこそあらわれているという発想である。そのため、方言敬語をめぐるのは、古いものが残っているという側面と、敬語は洗練された複雑なことば遣いという観念のもとに、敬語体系がしっかりある方言とそうでもない方言という側面に重点が置かれて研究されてきたのでないかと考える。当然のように、東北方言は敬語体系があ

まり整っていない方言と捉えられ、それが「西高東低」という表現で語られてきた。

ここで、寄り道をする。方言研究者にとって方言や方言話者はどう映っているのだろうか。標準語話者と異なるのは音や語彙、文法だけだろうか。安田(1999)にまとめられた方言観のうち、特に前者の見方、つまり方言に対するロマンティックなイメージが方言研究者にはなにかとあるように感じられる。研究対象に対する愛着をもつことは何ら不思議なことではないが、現代においてもこのような思いがどこかにあるように思われる。正式の、丁寧な、きちんとした標準語・共通語(本稿では、この二つの語彙を区別しないで用いる)と、くだけた、時に粗野な、しかし率直な気持ちを表現する、普段の言葉遣いとしての方言といった、いわば対立的な発想を、方言のみならず、方言話者にもあてはめ、方言話者は純朴で、素直、そして正直者であると思い込んでいるふしがあるのではないだろうか。このことは、一般市民と変わることがないだろう。

一例として、方言研究において広く知られた藤原与一氏による1970年代における方言観をここで引用してみたい。藤原(1977:86-87)は、「方言会話の内面」という項目で、「方言会話のことばが、独特の生きかたをしている」と述べ、方言会話の根本として、1つめに、「素朴・至純な民心が指摘される。」つまり、「表現のいつわりなどは出てこない。(もとより、原則論である)」としている。2つめに、「発言者の単純率直の性が指摘される。曲がった根性の「もの言い」はしないのをつねとする。思考を簡明にむすんでいく。」そして、3つめに、「根本的に実用を重んじる、醇乎とした実用主義が」あるとまとめている。

つまり、方言を用いた会話は、「いつわり」や「曲がった根性の「もの言い」」をすることなく、「実用中心」であるとしているが、このような見方をさらに方言話者に対してもあてはめてしまっているように思われる。しかし、あたりまえのことだが、実際は方言を使おうとも、相手の顔色をうかがいながら、時には嘘をつき、慎重に、かつ巧妙に用いているのであり、それが人間言語の重要な特徴の一つといえる。いつわりのない、実用だけの言語があるとしたら、その使用範囲は限定的なものにならざるをえなくなるだろう。

40年以上前の藤原氏の発想は今やすっかりなくなっているのではないかと期待したいところだがどうだろうか。というのも、このような方言観は、小林・澤村(2014)において、「未発達」とされた、特に東北方言地域の方言話者の言語的発想法の記述に見いだせるからである。「発達」した近畿地域と異なり、藤原氏のいう「素朴、至純」「単純率直」「実用」といった特徴づけが、東北方言話

者の話し方についてなされている。具体的にあげると、東日本の方が、その一番最たる地域は東北地域だが、言い方が「実質的」(60ページ)、「大雑把」(69ページ)、「単刀直入」(71ページ)、「飾り気のない」(71ページ)、「ストレート」(73ページ)、「ぶっきらぼう」(73ページ)、「おしつけ」(79ページ)などと評価づけている。方言に対する一種のロマンティックな見方からすれば、東北、周縁地域の方言の方が、藤原氏のいうような、より方言らしい方言といえるかもしれない。方言研究者は方言、方言話者をこういった理念型、もしくはステレオタイプをもってしているのではないだろうか。しかし、かつて東北方言を利用してサギをはたらいた女性もいたのである¹。

一方、上述のような方言に対する解釈について懐疑的な研究者もいる。加藤正信(1985:12-15)は、「純粹方言という幻を追い求めてはならない」といまいしめつつ、「純粹方言の会話はむしろ貴重な文化財—それはすでに自然の生命力を失い庇護のもとで鑑賞用になったお芝居の言語—であって、生態ではないとも言えよう」と指摘している。つまり、調査して得た方言の会話は、実は方言話者の「お芝居の言語」にすぎず、日常生活で使われているものというよりは、いわば博物館で保存され、保護されているような代物でしかないという想定のもとに分析していくべきであると述べている。方言、方言話者、そして方言会話は真空状態の中で独立して存在しているわけではなく、歴史的社会的文脈の中でしっかりととらえなおしてみることが重要である。

3. 方言圏論にみる近畿中心主義

3.1 西高東低という見方

発想や表現形式に地域差があるだけでなく、「西高東低」であるとする小林・澤村(2014)の論拠は、柳田国男の方言圏論にある。都市化が進み、より複雑な社会を形成してきた近畿、西日本地域から、農業中心の、単純な社会である東日本地域、特に東北地域へことが伝播していったとみなすものである。このような社会環境の差が結果的に発想や表現形式に差をもたらしてきたと解釈している。

具体的には、以下のような7項目にわたる言語的発想法をあげながら論じて

¹ 「東北弁を使って寸借サギ」(『朝日新聞』1961年8月1日付)という記事によると、東京において、宮城県出身の女性が東北出身者の女性たちを対象に、東北弁を使って信用させ、金をだまし取っていたということである。

いる。ここでは短く紹介する（小林・澤村2014：165）。

〈ものの言い方の発想法〉

- ①発言性：口に出すか出さないか
- ②定型性：場面ごとに決まった言い方をするかしないか
- ③分析性：場面を細かく分け、それぞれに言い方があるかどうか
- ④加工性：間接的に言うかどうか
- ⑤客観性：客観的に言うかどうか
- ⑥配慮性：気遣いを言葉で表現するかしないか
- ⑦演出性：会話を演出しようとするかしないか

これらの項目において、前者が「発達した」西日本、特に近畿地域の特徴、後者が「未発達」の東日本、特に東北地域の特徴としている。そのうち、敬語問題については、⑥で扱われ、言葉で相手を気遣うかどうかといった観点からとらえている。小林・澤村（2014：120）では、「身内尊敬表現をもち敬語システムが発達しているのは西日本であり、東日本との違いが浮かび上がっている」とし、「西日本にはより複雑なシステムの地域が展開している」と指摘している。この点は、多くの方言研究者が共有している考え方でもあろう。たとえば、芳賀綏（1973：102－103）も、「敬語形式の発達度は、西に高く東に低い」としている。

ただし、敬語システムが「西高東低」となっている社会的要因についての見解は異なっている。5節でより詳しく扱うが、小林・澤村（2014：189）は、社会組織において、「北日本」には「絶対的な上下の関係」があるのに対し、「南日本」には「民主的な原則」のもと、「成員の平等性・独立性」がある社会であると特徴づけている。一方、芳賀は、「西日本のほうが見上げ―見下しの落差の大きい社会」と捉え、「コミュニケーション全般について、西日本のほうがタテの重みを負い、守るべき規範を多く持った社会という印象が強い」とし、西日本の方が上下関係があるという見方をしている。つまり、芳賀は上下関係のせいであるとし、小林・澤村は民主的な社会での気遣いのせいであるとしてとらえている。この両者の違いは大きい。はたしてどちらの推論がより説得力をもつだろうか。敬語の社会的機能はいかなるものであろうか。さらに検討すべき余地がありそうだ。

金田一京助（1959）は、敬語の起源とその発展について、神仏や自然物など

の「恐れ多い存在」に対するタブーから始まり、身内にも敬語を用いる絶対敬語を経て、身内をへりくだり、話す相手に対して敬語を用いる相対敬語に至ったと考えている。この点について、井上史雄（1989）は、身内敬語などの絶対敬語が、東日本ではなく、西日本で存在しているということから、むしろ、相対敬語中心の東日本の方が新しい敬語形式をとっており、「逆周圏論」になっているのではないかと述べている。この点で疑問がでてくる。従来の方言研究では、身内敬語などの絶対敬語がある西日本地域の方が「発達」していると考えられてきたが、金田一では、むしろ東日本地域の方が相対敬語をもつ段階に至り、「発達」したととらえている。「発達」の定義づけによって、見方が逆になってしまっている。この点からも再考することがありそうだ。

現代の標準語では、そもそも他人に向かって身内のことを尊敬表現を用いずに話すことが「教養ある者のことばづかいとされて」（加藤1973：40）いる。接客などや外部の人と話す場合には、上司についても尊敬表現を用いないように指導されるのが一般的である。つまり、標準語は相対敬語の段階に達している。この点について、加藤（1973：61）は、身内敬語は、「古代的な絶対敬語の名残り」ではなく、「京・大阪付近の都会地」に限っては「尊敬語を借り用いた丁寧表現」という解釈を提示している。以下は加藤（1973：61）の身内敬語の例である。

（1） 滋賀県の中心部で、親が先生に

- a. ウチノ〇〇チャンガイツモオ世話ニナツテイラレマシテ・・・
- b. ウチノ子ワ京都エ行カレマシテ・・・

加藤の指摘のように、近畿地域で用いられているような、身内敬語とみえるものは実は丁寧表現にすぎないと解釈すれば、「発達論」とは矛盾しないだろう。

いずれにしろ、小林・澤村（2014）が考えてきたような、身内敬語のある方がより気遣いがあり、「発達」しているとみなす主張は、再考を要するものと思われる。言語を「発達」との関係からみていくのは、慎重にしなければならないだろう。

3.2 発達史観

繰り返すが、小林・澤村（2014：169）は、方言を言語的発想法から検証し、「近畿は発達が著しく、東北は未発達の状態にある」としている。これは方言に

対する発達史観といえるだろう。この見方は、かつて印欧語族の諸言語が最高に発達した言語であると位置づけた発達史観と酷似しているように見える。高津春繁（1992：19－26）は、心理学者であるシュタインタールがかつて言語の分類を試み、比較分類法により諸言語を発達段階に結びつけて論じたことを紹介している。以下にその趣旨をまとめる。

表1 シュタインタールによる言語の型と発達度

言語の型	孤立語	粘著語	屈折語
言語の例	中国語	日本語、トルコ語	印欧語族の諸言語
発達度	未開	————→	最高次の発達段階

この考え方は19世紀という当時の進化論的な発想のもと、西欧を中心とし、そこから離れた地域、つまりオリエント地域などを周縁に位置づけた発想である。前者が後者を一方的に価値づけようとしたオリエンタリズムの発想にも通じるものである²。印欧語族の諸言語が一番発達した言語とする一方、アジア、特に中国語がその対極として、未開の言語とみなしている。しかしながら、この発達史観については、様々な側面から批判され、発想自体すでに破たんし、却下されている。文法の側面から、英語の例をあげると分かりやすい。英語はかつて屈折語的なタイプであったが、のちに孤立語的なタイプに「変化」している。進化論的な発想にそってみると、最高に発達した後に未開に逆戻りしたということになり、提唱された発達方向では説明できなくなる。シュタインタールの言語観から得られる教訓は、「発達・未発達（未開）」といったくくりで言語を分類することはできないということである。

3.3 方言圏論への批判：中心と周縁

方言圏論を軸に置いた言語分析に対して、批判的なまなざしを向ける研究者もいる。言語地理学的な観点から、大西拓一郎（2016：173－181）は、「方言圏論の出発点である「かたつむり」の分布には、「圏」的性質を高らかに謳うための客観的根拠が乏しい」とまとめている。さらに、新しい単語の発生地

² オリエンタリズムとして西洋中心主義を批判したサイドは、オリエンタリズムに根差した言語学者が、言語が違えば、その話者の心性、文化、潜在力、身体なども違うと主張していることを紹介している（Said 1978：233）。

についても、「中心に近いほど「文化」的で、離れるほど非「文化」的というような中心性と距離の相関の想定は、現実にはそぐわない」とし、「中心地的なところもあればそうでないところもあり、「中心性」を基準にする限り、特に傾向が見いだせない」と指摘したうえで、「同じ場所が繰り返し言語変化の出発地点となることは、きわめてまれではないか」と結論づけている。方言圏論をもとにした中心と周縁というとらえ方への疑問である。

日高水穂（2014：247）も、「周辺」の言語変化が「中心」に伝わっていくという現象を示しながら、「方言研究において、近畿地方を中心に据えた圏分布に格別の注意を払ってきたことに加え、近畿方言を見る際に、「中心」（畿内）の優位性が絶対視されてきたことも無関係ではないように思われる」と、近畿地方、もしくは近畿方言を中心として価値づけすぎた従来の方言研究のあり方に対して警鐘をならしている。

さらに、扱う調査やデータについてみると、特に方言敬語についての例ではないことを断っておくが、小林・澤村（2014）は、言語のデータや例を豊富に扱っているものの、談話資料の中には1960年代のものもあるが、意識調査やちょっとしたエピソード的な例などについては、1990年代から2000年代にかけて行われてきた比較的新しいものを中心をなしている。それらは陸地海路を利用した情報伝達の時代というより、ラジオやテレビ、インターネットなど、瞬時にして世界中かけめぐる時代を背景としており、地域差を従来の方言圏論で解釈できるかどうか疑問に思われる。「岩手の山奥」にいてもインターネットで情報を得たり、発信できる時代である。その点について、加藤（1985：13）が、地理的研究という項目のもとで、以下のように説得的にまとめている。

いまや言語の伝播が地を這うことを止め、電波等によって空からばらまかれる時代になった。いまから三十年ほど前までに形成された分布であれば、いわゆる言語地理学によって解明できたかも知れないが、現在進行しつつあるものは、それでは説明できなくなっている。現在でも新たな地域差というものは形成されつつあり、たとえば、新しい語の分布が埼玉に濃く、岩手には薄いという事実が依然として地図上に現れているであろう。しかし、それは旧来の言語地理学のように、中央から次第に埼玉、栃木、福島、宮城というふうに土地を伝わって伝播しつつあると解するのではなく、テレビなどで中央語、新語が与える一定の刺激に対する各地の反応の度合の差であると言えるようである。

つまり、ラジオやテレビ、そしてインターネットなどが情報を瞬時に伝えあう現代において、様々な言語事象を近畿地域の、もしくは中央のことばを中心にする従来の方言圏論では扱いきれない場合が少なくないと考えられる。もし、圏論が有効であるとしたら、それはある特定の時代や事柄に限定して適用すべき理論ではないだろうか。

4. 方言敬語のとらえ方

4.1 敬語研究のあり方：言語表現（形式）のみの分析の限界

敬語は相手に対する敬意や配慮を示すものという解釈だけではとらえきれないということはよく知られており、自分が丁寧な人間としてみてもらいたから、あるいは、相手と距離を置くため、はたまた相手への嫌みといった、敬意や配慮とは逆の含みをもたせるなど多様な機能をもっている。一方、相手に対する敬意や配慮の伝え方についても、むしろ敬語を使わず、またはイントネーションによってあらわしたり（加藤1973：80）、時には黙ったまま、ただ相手に寄り添うだけでも十分な場合がある。それは、会話者相互の関係や置かれた状況、そしてまわりの社会や文化環境などいろいろなものがかかわって伝えられていくものだからである。単に敬語表現の有無だけでは判断しきれないものである。そこに形式を重視する言語研究の難しさ、もしくは限界がある。敬語の有無や形式、数に注目するだけでは不十分であるといえよう。

南不二男（1974：14－16）は、「言語的、非言語的両方のコミュニケーションを統一的に把握するような理論の中での敬語の位置付けを考えるべき」だとし、「方言の敬語については（中略）さらにひろい範囲の見方から研究する余地がある」り、それにはまず「それぞれの言語、方言についてのくわしい個別的な研究が必要である」と指摘している。南（1973：10）は、敬語研究への警鐘として、その副題「敬語はことばだけとは限らない」からも訴えているように、敬語を扱うならば、従来のせまい範囲の敬語をみるだけでは不十分であり、他の言語表現や非言語的な行動なども対象にしなければならないと主張している。野元菊雄（1974：63）も、「敬語形式の分析には、表にあらわれたものではないものも考えに入れなければならない。（中略）あらわれた限りの、つまり文字化できる部分についてだけの分析ではダメである」と強調している。

このように敬語については、様々な事柄を視野に入れて分析する必要があるが、小林・澤村（2014：119－143）では、さらに一歩ふみこんだ見方を提示し

ている。それは、敬語の「発達」度とその他の配慮表現の程度に相関関係があるともっている。つまり、「敬語が発達している西日本は、その他さまざまな手法によっても積極的に気遣いを表そうとする。一方、敬語が未発達な東日本は、それ以外の配慮表現もあまり用いない」と主張している。しかし、繰り返すが、気遣いがどのような形でなされているのかとらえるためには、言語的なもののみならず、非言語的なものも対象にし、方言地域独自の社会文化や人間関係などを十分に把握した上で分析しなければ、当該方言地域の気遣いの総体をつかむことは不可能であろう。

4.2 位相差

敬語については、さらに考慮すべき点がある。共通語と同様であるが、地域差よりも、位相差が大きく影響を与えているのではないかという指摘である。同じ方言地域内でも、敬語に関する限り、職業、学歴、年代といった要因がその使用に影響を与えているのではないかということである。たとえば、井上（1989：15）では、「方言の敬語に関する限り、「荘内方言では」とか「道南方言では」などのように広い地域を一般化するのは適切ではない」とし、地域差よりも学歴差、職業差などの方が大きいと主張している。加藤（1973：29-30）も、「同じ土地でも、職業、教養、階層、性別、年齢などによって若干異なる。敬語の場合はこの位相による差が特に激し」と指摘しており、加えて、相手や話題なども敬語使用に関係してくるとまとめている。つまり、敬語の場合は、方言であっても位相差が深くかかわっているため、そのことを十分に配慮しながら調査分析すべきものであると考える。地域差としてのみ単純にまとめてしまうことはできないといえるだろう。

4.3 単純比較や標準語基準の問題

ここでは、方言同士の単純な比較や標準語もしくは学校文法などを基準として方言をあてはめてみていくことの問題をみていきたい。

まず1つめに、ある敬語表現がある地域とない地域があるとして、前者ではことばからの配慮がなされ、後者ではそれが無いと語ることが何を意味することになるだろうか。このようなとらえ方はことば万能主義、もしくは形式中心主義ではないだろうか。ことばで表現するから、しないからという基準で、当該方言地域を、「発達」か「未発達」という二分類のいずれかにあてはめてしまうのは、上述したシュタインタールの言語観と共通している。

熊谷智子（2018）は、方言同士をある特定の配慮を示す表現の有無で単純比較し、その有無によって、方言地域や方言話者の特徴づけをしてしまうことのアヤウさを指摘している。熊谷智子（2018：8）によれば、「単体の表現形式の使用・不使用に関する調査結果を一足飛びに話し手（あるいはその話し手に属する地域）のコミュニケーションの特徴や姿勢に結びつけることができないのは言うまでもない。たとえば、授受表現が相手への配慮や丁寧さを示す表現であっても、言語的に配慮を示す手立ては他にも数多く存在するので、授受表現だけで配慮の有無や度合いは語れない。したがって、たとえばある地域に「～てもらう」の使用が多いという結果から指摘できるのは、何らかの配慮を示す際に当該地域では授受表現がその手段（の1つ）として使用されやすいということであろう」と、表現の有無をそのままそれぞれの地域や話者の特徴づけとして解釈することに懐疑的な見方を示している。前述してきたように、ある表現を取り出して、各方言における当該表現の有無を単純比較し、方言や方言話者の特徴づけ、さらには、その表現のある方が言語上の配慮がみられるといった評価づけをすることは避けるべきである。当該地域において、当該表現に代わる他の様々な表現や非言語的なものなどを最低限確認しながら検討すべきものであろう。

また、加藤（1973：28）は、「言語としての敬語の解明は、その方言自体を総合的に分析した結果、その待遇上の質なり程度なりの枠組みとそれを表現する形式との関係を明らかにすること」だと述べている。まず何よりも当該方言における待遇の枠組みを調査分析することが敬語の解明にあたってすべきことだとおさえている。たとえ同じような敬語表現が複数の方言に存在するとしても、ある方言地域での意味合いと別の方言地域での意味合いが全く同じとは限らない。その意味合いは、それぞれの方言地域における待遇の体系をふまえた上ではじめて明らかにできるものと考えられる。その表現自体の有無だけでは、それぞれの方言地域での意味合いを特定するのは不十分であろう。

さらに、加藤（1973：30）では、敬語体系が「発達」している地域であっても実際にそれらの敬語が使用されていないかもしれないし、敬語体系が「単独でも気軽によく使う地域」もあるだろうと指摘している。敬語の種類や体系とその使用実態との間に差のある可能性を示唆している。その上で、加藤（1973：49-50）は、「方言では謙譲表現が発達していない」と指摘しつつも、たとえば「無敬語地帯」とされる方言地域でも何らかの配慮がなされていることを、飯豊毅一（1969：267）の例（福島方言）をあげて説明している。「コレ チット

バガリダゲンドモ モッテッテ クンツェー（これ少しですが持っていった下さい）」と言いつつ、「山のように新鮮な果物をさし出すのが普通である」という。この点から、たとえ方言自体には敬語表現がないとしても、「地方人一般はむしろ謙譲の態度、謙譲表現をしたい気持ちが強い」のではないかと推測している。このエピソードが典型的に示しているように、敬語が「未発達」とされる方言地域の人々が、具体的な物によって相手への気持ちを表し、それで関係が十分に良好であるとするなら、当該方言地域での敬語の役割はむしろその程度でしかないと解釈できるのではないだろうか。加えて、繰り返すが、「発達」「未発達」という発想では、いずれどの地域も「発達した」地域のような言語表現を用いるようになる、つまり、地域差や発想差がなくなり、一律同じ発想や表現をもつようになると予測するのだろうか。ちなみに、どの地域も同じような、のっぺらぼうの社会になるのではないかという懸念は、資本主義的な社会のいきつくところという見方もあることはある。が、これは少なくとも「発達」した近畿地域や西日本からの伝播による均一化とは違うものではないかと思われる。

2つめに、学校文法や標準語との関係から方言敬語について検討している加藤（1973：79－80）は、「方言の敬語が必ずしも「尊敬」「謙譲」「丁寧」という学校文法では割り切れない何物かを持っている」と示唆している。学校文法での敬語体系とは違った、方言における敬語体系が存在しているという点も考慮すべきだと述べている。そして、加藤（1973：28）は、「未知の方言を標準語での語感などから見当をつけるわけには行かない」として、標準語の基準を方言にそのままあてはめて比較検討することも慎むべきだと考えている。つまり、標準語や学校文法を基準に方言を論ずることの限界を提起している。

具体的な例を紹介しよう。沖裕子（2018：251）は、松本市を中心とした長野県中信地方の敬意終助詞「イ」「イネ」「ンネ」「ネ」「ジ」「セ」などについて考察している。共通語の敬語体系では「敬意」と「親しさ」は矛盾する概念であり、同時に表すことができないが、長野県方言では、1語で「敬意」と「親しさ」を同時に表すことばがあり、敬意と親しさが矛盾することなく表現できると述べている。沖（2018：263）によれば、これらの終助詞は、近所の顔見知りの間で日常的に使われるもので、互いをよく知っており、「協働して地域をつくりあげていることの自覚がある人々」の間で使われるという。此島正年（1994：194）は、青森方言における敬語法を紹介し、津軽地方において「ノ」という終助詞は同意を求める意味を強くもつが、「軽い敬意—というよりもむしろ親愛の気持ち」

ちを表わすことを指摘している。敬意と親愛が合わさったような意味合いをもつ終助詞の存在がここにも確認される。

さらに、此島（1994：198）は、沖と同様に、中央とは違い、方言地域における敬語法は、「多分に親愛の気持の加わったもの」になり、それは「方言発達の基盤が同族的な地方社会であることの、当然の帰結」であるとし、方言社会における敬語のもつ機能について述べている。ここであげた方言敬語の例をみるだけでも、共通語もしくは学校文法における敬語体系を基準としているだけではとらえきれない、方言地域社会のもつ共同体のありようによって方言独自の敬語体系がつくりあげられてきたことが伺える。このような例は、他の方言にも容易にみつけるのではないだろうか。現代の共通語では、敬語はむしろ疎遠の関係にある場合に、つまり距離をおくために用いられる傾向にあるが、方言地域での敬語は、親しみを伝えるものとしても用いられることがあるという気づきがある。

以上まとめると、加藤らが指摘したように、標準語もしくは中心とされた方言の敬語体系を基準におきすぎず、まずは、各方言における敬語体系や待遇の体系を言語的、かつ非言語的な観点から調査し、各方言における個々の表現のもつ意味合いを確認したうえで、方言同士の比較へとすすめるべきであろう。

5. 敬語と社会構造

仮に敬語の「発達度」が「西高東低」であることを受け入れたとしても、敬語をめぐる社会的背景の捉え方は研究者によっても違いがある。2節ですでに述べたが、ここで再度取りあげたい。敬語がなぜあるのかという点について、芳賀は上下関係のためだとするのに対し、小林・澤村（2014：119）は「気遣い」と言えば敬語である」と断言し、民主的な関係のもとでの「気遣い」のためだという見方をしている。菅野宏（1982：390）は、敬語語法を失ったのは、「地主階層の消滅」と「自由な流通機構の発展のため」だとし、階層差がなくなり、自由な関係になったため敬語がなくなってきたとみなしている。また、藤原（1956：54）では、方言敬語は「はなはだしく封建的なもの」もあるだろうと述べている。つまり、芳賀や菅野、そして藤原は、敬語とは上下関係を背景に存在するものと考えている。今日の敬語の機能が、縦の関係（＝上下）をあらわすものから横の関係（＝親疎）をあらわすものになってきたといわれているが、方言の敬語については、昔ながらのものも受け継がれてきた（残っている）と

すれば、「縦の関係」を背景とした社会関係が要請したものではないかという考え方も無視できない。

小林・澤村（2014）を含む方言研究において、敬語の「豊かさ」と当該の方言地域の社会のありようとの関係が論じられることも少なくない。根底には、「敬語表現が豊かな」都会と「敬語表現が少ない」農村といった対立的な見方で、「都市＝複雑、農村＝単純」とする見方でもある。極端な場合、「無敬語地帯」という表現もある。小林・澤村（2014：195）では、敬語についてのみ特に論じているわけではないものの、「農村型社会に比べて、都市型社会ではコミュニケーションの頻度が高く、その内容も多様であることは経験的にも納得できる」としている。この点についていえば、ものづくり中心の農村型社会と比べて、都市型社会では、商業活動がより頻繁にかつ活発に行われ、いわゆる商売上、言語という手段によって客にアピールすることが多くなるため、当然言語上のコミュニケーションが頻繁になるというのも一理ある。

ここで、特に商売上「発達」している現代の大阪について、方言とのかかわりから述べているものを紹介しよう。まず、井上宏（1995：140－141）では、「大阪弁」の特徴について、結局は商売が根底にあり、それは交渉事であり、「口が大事」になるとしている。お互いに相手のねらいをつかむため、「いろいろ面白い言い回しで探りを入れたり、また緊張関係も解かないかんから、そこに笑いを入れて、それが潤滑油にもなる」。「断る場合でも相手を傷つけないように」気遣いし、相手に嫌われないように、そして気に入ってもらえるように、「ギリギリ」の交渉事をやりとげるために、「発達」したのではないかとまとめている。また、彭飛（1999：33）も、「大阪弁」について、「商人気質」が強く、「相手の機嫌を損ねないよう微妙に使い分け、柔らかく優しく表現す」ることが特に充実していると指摘している。近畿、もしくは大阪という地域のことばに敬語を含めた多様な言い回しができたのは、商売という交渉事をうまく切り抜けるためだというのは納得できる。

つまり、方言敬語は、歴史的に上下関係を背景として用いられてきたものが、近代以降は、商業社会の進展にともない、特に都市部では、商売上の「気遣い」として用いられるようになり、現代の標準語や共通語の敬語と共通する特徴をもつようになったと考える方が自然ではないだろうか。小林・澤村（2014）はむしろ（近代以降の）商業社会を念頭において、方言敬語を解釈しているように思われる。

現代において、標準語・共通語における敬語は、特定の地域に限定されず、

上下関係というよりも、親疎関係からみて疎遠で距離を置く間柄の人に対して、深く立ち入らないようにするために用いられることに重きが置かれている。一方、方言敬語は、同じ地域社会にいる顔見知りの人に対して用いられるもので、地域の有力者、実力者に対しては上下関係のもとに用いられ、かたや沖や此島があげたような、隣近所の親しい人たちに対しては親しみを示すため（親密な関係）に用いられているのではないかと考えられる。その点で、方言敬語の方がより複雑な様相を呈しているのではないかと推測できる。敬語の社会的機能については、さらに考察していきたい。

ここまででは、方言敬語が「発達」した要因や社会的背景をみてきたが、逆に「未発達」の理由、社会的背景についてはどう考えたらいいだろうか。中井精一（2014）は、敬語が薄い地域に対する司馬遼太郎の解釈を紹介しつつ、中央とは異なる価値観をもつ社会へのまなざしが大切であると主張している。司馬遼太郎（1990：207）は、高知で「オラ・オマン」（おれ、おまえ）という平等の一人称、二人称が使われている点について、「土佐人の自由と平等へのあこがれ」によるものと解釈している。また、和歌山などの紀州方言に敬語が希薄なのは、「上下の関係がゆるやかで、その気風が中世日本にめずらしく市民的だった」（司馬1993：246）のではないかととらえている。このことから、中井（2014：312－314）は、中央のような敬語体系をもたないことが何を意味しているのかを考察し、「中央とは異なる価値観を有する平等を基調とした社会がその背後にあって、そこにはその社会に応じた無数のルールと価値体系もある」と主張している。つまり、「日本各地には」「近畿地方中央部とは異質な社会が存在する」ことを念頭に物事をとらえていくべきだと論じている。「近畿地方中央部」の基準をそれ以外の地域にやみくもにあてはめるべきではないと訴えているように思われる。さらに、司馬の解釈では、敬語が薄い社会の方が平等で市民的な社会ということになる。前述した芳賀、菅野そして藤原の主張に近い。つまり、上下関係が強くある社会こそ敬語が必要な社会ということだ。

最後に、「発達」と都市化を関連づけている小林・澤村（2014：195）は、農村型社会と都市型社会では、当然のことながら、ものの言い方が都市型の方が「発達」し、農村型の方が「未発達」であると述べ、人口が多い都会は人間関係が複雑で、人口が少ない、そして人の移動の少ない農村は人間関係が単純であるという見方をしている。なぜ人口の少ない、移動の少ない農村型社会の方が、「単純」な人間関係にあると言いきれののだろうか。

農村地域出身の私のわずかな経験を振り返ただけでも農村地域の人間関係

が必ずしも単純だとは言いきれないものがある。私からすると、むしろ人口の多い都市部における人間関係の方が、気を使わず、隣り合わせになっても無視することができ、あいさつなどしなくても構わない、道に人が倒れていても声をかけることもなく、気を使わなくてすむといった、「ドライな関係」であると思ってしまうほどである。農村地域の方が、隣近所に常に気を使い、朝から晩まで、道端で会うたびにあいさつなどの声かけを忘れず、もらいものしたら、必ずお返しをする、どこかに行ったらそのことを伝えるなど、絶えず「気を配る関係」にあった。どんなときもぞんざいにせず、愛想よくしなければならぬということを、親や地域の人たちのふるまいを通して教えこまされてしまった。都会とは正反対で、「気疲れ」するほどである。あるいは、別の方言地域では、これとは違った人間関係があるだろう。とにかく都会よりも農村地域の方がコミュニケーションが単純だなどとはとてもいえない。中井が指摘しているように、方言社会は、人口の大小にかかわらず、それぞれの地域共同体の人間関係が、それぞれの文化、習慣などにのっとって営まれているものであり、それらを慎重に見極めた上でなければ、その社会について捉えることはできない。一つのものさしですべてを価値づけることなどできないのではないだろうか。このことは、都会であってもあてはまるだろう。「複雑」そして「単純」であることの定義づけをより明確にしていける必要があるだろう。

6. 東北地域における丁寧表現

これまでは従来の敬語や方言、方言敬語に対する前提、とらえ方、分析方法や社会的背景について振り返ってきた。ここでは、敬語が「未発達」とされた東北地域が、丁寧な言い方も含む待遇表現をもつ方言社会であることを具体的な例をあげながら確認したい。

6.1 東北方言における身内敬語

近畿や西日本に比べて、東北方言に身内敬語が無いことも「未発達」とみなされる理由となっているが、実は、東北地域でも身内に敬語を使用することが報告されている。菅野宏（1982：388）は、福島方言について、「敬語をしつける家は、町村に何軒かあ」と述べつつ、たとえば、尊敬の「いらっしゃる」という意味で、「エル（居る）」「アル」が身内にも使用され、準助動詞的によく用いられていることを、以下の例をあげて示している。

(2) 嫁が姑のことを客に話す場合（標準語訳は筆者による）

- a. 「ソーダンヤッテ（エ）ラッテ」（相談していらっしゃって）
- b. 「カエラルハンダガラ」（お帰りになるようだから）

加藤（1973：42）では、東北や関東では身内に敬語を使うのは、「あくまでも言いまちがいでしかない」としているが、必ずしもそうではないと考えられる。上の例は、むしろ農村地域の人間関係がことばによってよくあらわされている例だと思われる。農村地域では、近所とのつながりも家族と同様に密であり、また農村地域における嫁の立場の低さがこのような「身内敬語」を使わせているのではないかと推測する。都会と違った、微妙な人間関係が農村地域にはあることも含めて、東北方言においても身内敬語があることは何ら不思議ではない。

6.2 東北における丁寧表現

東北方言での丁寧表現は、ことによれば共通語なみに、もしくはそれ以上に多様なものがあるという指摘があり、ここで具体的にみていきたい。

6.2.1 終助詞を用いた丁寧表現

菅野（1982：393－397）によれば、福島の方言において、丁寧語も階層によって区別があるという。「シ」が上層や商家、「エ」が町方、「ン」が在方や農村地域で用いられるとしている。以下のような例がある（標準語訳は筆者による）。

(3) 兄嫁が小姑に話している

「ナニエ、ドーシタノエ。スグエンカラエ、チョコットマッテデナエ。」

（なんですか、どうしたのですか。すぐ家に帰るから、ちょっと待っててください。）
（菅野1982：396）

親族内で丁寧表現「エ」が用いられている例である。このように、東北方言においても階層によって丁寧表現が使い分けられている。また、聞き手を尊敬する「ス」について、佐藤稔（1982）が秋田の方言の例を報告している。山形、宮城、岩手の方言でも丁寧表現として「ス」「ガス」などが用いられ、(4)に示したように、あいさつなどでは「オ」を付加した言い方が、東北地域に広く存

在する。

- (4) a. 「オハヤガス」 (おはようございます)
b. 「オバンデガス」 (お晩でございます：こんばんは)

これらは田舎っぽく響くかもしれないし、外国文学の翻訳などでは田舎や下層階級を連想させる表現としてよく使われるものだが、当該方言地域では丁寧であり、親しい隣近所の人たちの間で普通に使われている親しみを込めた丁寧表現である。

本堂寛(1964)は、岩手の方言について、丁寧叙述「です」の表現を9地域を対象に調査し、最上、やや上、対等レベルの3段階に使い分けられていると考察している。これを見る限り、必ずしも東北方言には丁寧表現が少ないとは言いきれないだろう。以下に、9地域のうち、北部沿岸地域、盛岡地域、一関地域の3か所について最も使用例の多いものを紹介する。

表2 岩手の方言における丁寧表現「です」の使い分け

	北部沿岸地域	盛岡地域	一関地域
最上表現	デゴザンス・ダ	デゴザンス	デゴザリス
やや上表現	デゴザンス・ダ	デガンス	デガス
対等表現	ダ	ス	ダ

(本堂(1964:31)第四表を簡略化して抜粋)

佐藤亨(1982:350)は、秋田の方言において、「どこに行くか」という質問文について、以下のように、相手によって、終助詞の丁寧度が4段階に使い分けられることを指摘している。

- (5) a. ドッチャ ゴザリス (先生などに)
b. ドッチャ イグノシャ (先輩・目上に)
c. ドゴサ エグノシャ (同じ位の人)
d. ドゴサ エグノヤ (目下、自分の子供に)

同様に、「いい天気だなあ」という平叙文については、以下のように使い分けられている。

- (6) a. エーテンキデ ゴザリス (最も目上の人に、老人、女性が稀に)
 b. エーテンキデ ガス (目上の人に、一般的)
 c. エーテンキ ダネー (同等に)
 d. エーテンキダナー (目下に)

以上、東北方言においても、丁寧度が何段階かに分けられており、近畿地域もしくは中央よりも単純であると決めつけられない³。

最後に、方言敬語の調査方法について興味深いコメントを紹介しよう。本堂(1964:24)は、岩手の方言の敬語秩序を考えようとしたきっかけについて述べている。東北地域の「調査カードの敬語の欄は、多くの場合敬語なしと斜線が引かれる」ことに疑問をもっていた。その点について、方言地域において生活

³ 人称においても、相手との関係で何段階かに使い分けられていることが報告されている。本堂(1964)では、岩手の方言における二人称「あなた」について、9か所で調査した結果、2～3段階程度に使い分けられるとまとめている。以下の表は、4か所の地域について最も使用例の多いものを抜粋している。

表3 岩手の方言における二人称「あなた」の使い分け

	北部沿岸地域	盛岡地域	北上和賀地域	一関地域
最上表現	アナダ	オメサン	アナダ	アンダ
やや上表現	アナダ	オメサン	オメー	アンダ
対等表現	オメー	オメー	オメー	オメー
目下表現	オメー	ウナ	ウガ	オメー

(本堂(1964:26)第二表より地域を抜粋してまとめた)

また、森下喜一(1982)でも、岩手の、特に九戸郡山形村の方言において、3段階の丁寧度があると報告している。

目上	近所の友人	親しい友人
アンタ	オメア	ンガ

佐藤(1982:289)においても、秋田の方言について、以下のように、3段階に使い分けられていることを報告している。

上	対等	下
アンダ	オメア	ンガ

このように、東北方言の二人称について、丁寧度に段階があるということが確認され、東北方言の丁寧表現がとりわけ単純であるとはみなせないことを示している。しかしながら、東北方言で最も丁寧とされる二人称「アンダ」が、標準語からみて、粗野、乱暴と判断されてしまうことがおおいにしている。この点からも、東北方言が標準語を基準に判断されてしまう理不尽さを思わずにはいられない。

の中で自然に用いられている敬語表現を、「突然その地に入り込んだ調査者が抽象的に敬語を聞き出そうとしても不可能であったのではないか」と推察している。これは重要な気づきである。特に、東北方言は、いわゆる「ズーズー弁」と蔑まれてきた歴史的経緯があり、そのような「方言コンプレックス」を抱えこまれた東北方言話者にとって、自身の方言について聞かれること自体が恥ずかしいといった居心地の悪さとともに、自身の方言にまさか敬語といった「上品で丁寧な」表現などあるはずがないと思い込んでしまっていた（る）のではないだろうか。このような点から、本堂が鋭く見抜いているように、これまで採用されてきた調査方法や得られた調査結果について、中には再考すべきものもあるのではないかと思われる。

6.2.2 命令表現における丁寧表現

小林・澤村（2014：67-68）は、大阪の命令表現が多様であることを指摘し、東京や仙台との比較を行った上で、大阪が一番で、東京が続き、仙台が最も少ないとまとめている。そこでは、普通体の命令形式のみを扱っているため、「敬意を含んだ形式を含めるともっとバリエーションが増える」と述べつつ、「残念ながら、各地のそうした実態は十分明らかになっていない」と断ったうえで、「命令に関わる表現の発達が、西高東低の傾向を示すことは予想がつきそうである」と結論づけている。大阪における命令表現が多い理由は、「対人的な感覚の鋭さと、対応のこまやかさ、敏捷さ」があるためだとする尾上圭介の解釈を紹介している。繰り返すが、小林・澤村（2014：178）が、「中央、都市」と想定する地域は、井上（1995）や彭（1999）なども述べているような、商売上、客に対して、気持ちよく買ってもらえるために「気を使った言い回し」を駆使している地域のことであろう。半面、だからといって、農村地域の人たちが「細やかな使い分け」をしていないともいいきれない。しかも、方言地域ごとの命令表現、敬意を含んだ表現が「十分に明らかになっていない」時点で、「西高東低」と予想することはできないのではないだろうか。少なくとも、東北方言における終助詞などを中心とした研究をみ限り、近畿地域の方言よりも「未発達」だとは必ずしもいいきれないだろう。

ここでは、特に終助詞を用いた命令表現についてみてみよう。金田一（1944：238-240）では、東京の言葉を共同語と称し、むしろ田舎より簡単になり、荒っぽくなっていると指摘している。東京の言葉は、文末が三段階（目下、同輩、目上）の「だ」「です」「でございます」という表現しかなくなってきたと述べ、

「都人士の間では、都こそ敬語がむづかしく発達してゐて、田舎の詞は粗末なものと考えられがちであるが」としながら、盛岡方言にもきちんとした敬語表現がそなわっており、相手によって幾段にもなることを指摘している。たとえば、「召さる（する）」の命令表現について、以下のように、6段階あることを示している。左から右にいくにつれて、丁寧度が下がる。

- (7) 召^みさりあんせ（なさいませ）、召^みさんせ、召^みさエ、召^みされ、
為^きしエ、為^せ

森下（1982：50－51）は、岩手の方言の命令形の敬語表現が、一般に、目上の人、同等の人、目下の人の3段階に使い分けられるとまとめている。以下に、「見なさい」という命令表現の例をあげる。

- (8) オミレンセー（目上） ミデー（同等） ミロー（目下）

さらに、「目ざめたか」という問いかけ文の例を示す。

- (9) オシナリアンスタカ（目上） オギアンスタカ（同等）
オギダガ（目下）

森下によれば、老夫婦の場合、妻が夫に対して「オシナリアンスタカ」を使うことがあるとしており、身内でも丁寧表現の使用していることがわかる。

5節でも扱ったが、社会的背景との関わりについて、森下（1982：54）は、敬語がかならずしも城下町において特に発達したものとはいきれないと述べている。岩手の方言について、「盛岡は、城下町であるから、特に敬語が発達したと思われるが、その影響力ははるか遠方までも及んでいる」とし、「城下町から離れた農村地、山間地などはあまり敬語の発達がみられないのが普通である。ところが、盛岡から北東へ約70キロの地点に九戸郡山形村がある。この山形村は、久慈市まで約15キロの地点にある山間地の農村であり、そこでも敬語がみられると述べている。つまり、従来は城下町という社会的特徴ゆえに敬語が発達してきたと解釈されてきたが、必ずしもそうではない場合もあることを示唆している。ことはそう単純ではないらしい。敬語と社会的背景についてさらに検討する必要があるようだ。

加藤淳（2009：5）は、岩手の方言について、以下に示すように、命令依頼表現でも、丁寧な言い方から乱暴な言い方まで揃っていることを紹介している。下にいくほど丁寧度がさがる。

- (10) a. ～すていだだけねあべが（～していただけないですか）
- b. ～すてもらえねあべが（してもらえませんか）
- c. ～すてけねあべが（してくれませんか）
- d. ～すてけねあが（してくれないか）
- e. ～すてける（してくれ）

斎藤義七郎（1982：320）は、山形の方言について、直接的な命令をせず、「見てきたらどう、見てきたらいいのに、見てこいよ」といった婉曲的に勧奨する表現があると述べている。

- (11) 見テ来ルンダ、見テ来^クンダ

さらに、終助詞「チャ」をそえることでもっとやわらかい表現になるとまとめている。

- (12) 分げでヤルンダチャ

このように、東北方言であっても、丁寧な命令表現が幾段階かにきめ細かく分けられている。ちなみに、終助詞ではないが、子どもの頃の私自身の経験を付け加える。近所の農家同士で総菜や野菜を分けあうときに、必ずといっていいほど「食べてすけて」と言いそえて手渡していた。これは、「私のうちだけでは食べきれないので、食べて助けてください」という意味で、物を渡すときに相手の負担にならないような配慮をするための「気遣い」のことばである。このような気遣いの表現は、共通語、あるいは近畿方言にはあるのだろうか。つまり、「西高東低」という結論を出す前に、特に東北方言地域においても、どのような「気遣い」の表現があるのか、より広範囲なデータをしっかりと収集する必要があるように思われる。

本堂寛（1982：268）は、岩手の方言での丁寧な命令依頼表現について調査している。ここでは、2地域について紹介する。

表4 岩手の方言における丁寧な命令依頼表現

語 地点	来てください (行って下さい)	召し上がって下さい	下さい	(書いて) 下さい
盛岡	オデッテクナン シエ	オアゲッテクナン シエ	オグレッテクナン シエ	(オガゲッテ) クナ ンシエ
一関	ゴザラッシャイ	オアガンナッシュ オアガンナエン	ケラッシエ クンツエ	(カイデ) ケラッ シエ (カイデ) クンツエ

(本堂 (1982 : 268) を一部改変)

また、福島の方言でも、菅野 (1982 : 390–391) によると、尊敬の命令形として「～ッセ」「～ラッセ」「～(ラ) ッシエ」「～ンセ」があるという。

以上、東北方言の終助詞において、相手により何段階かの使い分けをそなえた丁寧表現があることを示した。「未発達」とされた東北方言であっても、丁寧表現による待遇がきちんと存在しているのである。加えて、特に東北方言について、敬語体系の調査やデータ収集の仕方について再考すべきことがあるのではないかと考える。本堂 (1964 : 24) の気づきが60年たった今でもあてはまるような気がするからである。東北方言が田舎っぺで粗野だというイメージを、母語話者自身もいまだに持っている人が少なくないように思われる⁴。

6.3 「無敬語地帯」という語り方

方言敬語について文献を読み進めると、「無敬語地帯」という用語がでてくる。敬語がない方言地域ということらしい。無敬語地帯について、たとえば金田一 (1944 : 240–241) では、「栃木・茨城から、福島・山形へかけての田舎」にあり、ただし城下町は除くとしている。加藤 (1973 : 80–81) では、「福島(会津を除く)から静岡にかけての太平洋側と紀伊半島南部」が、「終助詞使用と命令・依頼の場合以外に敬語の枠がゼロである」と述べている。ただし、「福島北部、山形内陸のところどころ、長野南部、高知など」は、「無敬語地域」と「有敬語地域」の「中間的性格」をしていると報告している。さらに、静岡県の方言を考察している山口幸洋 (1987 : 48–49) では、「駿河、遠州の山村部や美濃揖斐郡の奥地は完全な無敬語地帯」と指摘している。

⁴ 伝統方言におけるこのようなきめ細かい丁寧表現や敬語も共通語の浸透とともに衰退しつつあることも確かである。それは、共通語、そして共通語の敬語の方が、方言よりも丁寧であると感じる方言話者が増えてきたためである。

一方で、無敬語地帯はないとする研究者もいる。藤原（1974：219）は、「無敬語と見られるようであっても、じつは、そこにも、なんらかの敬語法体系がある」としている。吉岡泰夫（1991：60）では、「終助詞については無敬語地帯はないようである」とまとめている。

この「無敬語地帯」という言い方自体が、当該方言やその方言地域ひいては方言話者について、上品さを欠いているというマイナスイメージをもたせることになってしまっているのではないかと危惧している。この点について、菅野（1982：391）は、「「無敬語地帯」とはわるい命名だと思われる」とし、「内容的に敬意ある語法をもって表現して、山家者といわれたりすることは理屈にあわない」と、敬意を含んだ言い方をしても、結局田舎者だとばかにされてしまうことの不条理さを訴えている。大石初太郎（1974：27）では、「福島県南部の地域は敬語のあまりない地域だ」と教室で語ったところ、当該地域出身の学生が「そんなことはありませんと反発した」というエピソードをあげている。偶然かもしれないが、菅野も大石も福島県の方言を無敬語地帯との関連で語っている。福島は「無敬語地帯」であるという見方が方言研究者の間で広く流通してきたことがよく分かる。

ここでまた疑問が生じる。そもそも「無敬語地帯」はもともと「無敬語」であったかどうかである。この点について、井上（1989：23）は、江戸時代の関東方言や荘内方言などの文献や資料をもとに、「かつては東日本全般が無敬語だった」などとは考えられない。むしろ、過去のかかなり整った敬語の、くずれるプロセスを考える方がよさそう」と主張している。つまり、東日本についても、もともと「無敬語」だったと想定するのは無理があるようだ。前述したように、金田一も、盛岡方言の方が共通語に比べ、何段階もの表現によってきめ細かく使い分けしていたと論じている。加藤和夫（1995：79）も、「伝統的金沢方言の特色の一つである敬語表現」が衰退し、「敬語表現に共通語を使うようになったため」、金沢方言のイメージが丁寧ではなくなったと結論づけている。つまり、東日本、特に東北地域においても、共通語が普及するにつれ、共通語が丁寧であり、方言が雑なもの、田舎のものというイメージを帯びるにともなって、方言敬語も丁寧とは感じられなくなってしまい、ますます衰退していくという悪循環のあげくに、地域によっては、「無敬語地帯」というレッテルまで貼られてしまうことになったのではないかと推測することも可能である。

また、無敬語だから雑、単純だと決めつけることも早計だ。繰り返すが、敬語で語られることが本当に丁寧かどうかは文脈を加味してみないと分からない。

場合によっては、嫌みや皮肉を伝えることにもなるからだ。山口（1987：47－49）でも、「敬語が豊かだからといってその土地人の性質が優れているわけではない。日本の支配制度の確立とともに発展した敬語は、普及の段階では商業の発達と関係が深く、今では偽善的な場面で使用されることが多い。無敬語社会がむしろ素朴で人間味豊かということもある」と述べ、敬語のありようとその話者の性格や、ひいては方言地域の話者集団の優劣に安易に結びつけることについて警鐘を鳴らしている。

さらに、丁寧さから言語の普遍性を扱ったポライトネス理論にそって方言を考察している吉岡（2011：16）では、方言が仲間内を示すアイデンティティマーカーとして積極的なポライトネスを持ち、一方、敬語は相手に立ち入らないとする消極的なポライトネスを持つ表現と考えている。だとすれば、方言は方言敬語を用いずとも十分にポライトだともいえる。ポライトネス理論においては、あいさつをしたり、冗談を言ったりするなど親しみを表わすものを積極的なポライトネスと考えているため、方言使用がそれにあたるというのは当然かもしれない。この点については、従来の方言研究ではどう解釈するのだろうか。

7. おわりに

本稿は、方言敬語の語られ方について、方言研究や敬語研究のありよう、そして敬語が「未発達」とされる東北地域における丁寧表現などを紹介しながら、それを軸に先行研究をまとめてきた。今回、小林・澤村（2014）において、敬語が「気遣い」を表現するものとしてとらえている点をふまえながら、都が奈良や京都にあった時代以降、近畿を中央とみなす方言研究は、近畿から「経済的にも文化的にも遠い」東北地域を最も周縁に位置づけて、東北方言を語ってきたのではないかと考える。

しかしながら、「中心と周縁」や「発達と未発達」といった対立的な語り方についてはヴァン・ダイク（1993）でも批判されている。社会言語学者であるヴァン・ダイクは、『エリートのディスコースと人種差別』（邦題は筆者の試訳）において、白人の政治家、大企業の重役、学者といったいわゆるエリートたちが、非白人、もしくは有色人や非ヨーロッパ人たちについてどのような語り方をすることで、白人・ヨーロッパ中心主義が維持されてきたのか、1980年代以降になされた具体的な談話や著書、インタビューなどを対象に調査分析している。そこからみえてきたことは、今でも近代以降の二項対立的な発想を軸に、白人・

ヨーロッパ系である自分たちの集団を優位に、非白人・非ヨーロッパ系を他者化して劣位に位置づけ、従来からのヘゲモニーを巧妙に維持しつづけているとしている。「巧妙に」というのは、第二次世界大戦後は植民地の独立やアメリカでのアフリカ系アメリカ人を中心とした公民権運動などの盛り上がりにより、あからさまな差別的な語りが減り、よりソフトで中立的な、「文化」や「文化差」といった表現を用いて差別性を弱めつつも、言語、宗教、習慣、規範、価値観などの差異をことさら強調することで、結果的に白人を優位に位置づける語り方である。それは、共通性よりも対立的な差異、多様性よりも序列をつけた語り方である。たとえば、「今風の・遅れた」「速い・遅い」「効率的・非効率的」といった対立的な表現を好んで用いる語り方である。具体的には、白人・ヨーロッパ系である「我々」を進歩にむすびつけ、一方で今でも「石器時代、もしくは中世に生きている」人たちだとして非白人・非ヨーロッパ系である「彼ら」を他者化する語り方である（van Dijk 1993：160－161）。

今回、方言敬語についてみてきたが、小林・澤村（2014）は、「言語的発想法」という表現を用いながら、二項対立的な発想のもと、近畿や関東（東京）を中心もしくは上位に、東北を周縁もしくは下位に位置づけ、結果的に「西高東低」といった、従来の序列を維持するような語り方を下支えしてしまっているのではないかと危惧している。たとえば、小林・澤村（2014）では（カッコ内は掲載ページ）、「中心部と周辺部」（54－55、118）、「中央部と周辺部」（19、44、45、69、123、169）などの二項対立的な表現がよく用いられ、一方で、東京と関西、近畿は共通性をもって語られている（105、109）。加えて、繰り返しになるが、近畿地域と東北地域は「都市型・農村型」「複雑・単純」「発達・未発達」といった対立的な表現で語られている。

小林・澤村（2014：206－214）が言語的発想法に変化が生じる時代とかわらせて、以下のように考察している。

言語的発想法が発達した時代＝「近代」

言語的発想法が未発達な時代＝「古代」

その上で、さらに以下のように、地域と関連づけをしている。

近畿を中心とした西日本、および関東→中央語の「近代」的状態と対応
関東を除く東日本と九州・沖縄、特に東北→中央語の「古代」的状態と対応

つまり、近畿などは近代化により発想法が発達し、「近代」的状态にあり、一方東北などは近代化が遅れ、発想法が未発達で、「古代」的状态にあるとしている。「古代」という表現は、まさに、ヴァン・ダイクが指摘した、「石器時代に生きている」人として、非白人・非ヨーロッパ系の人たちを他者化する白人側の語り方とどこか似ているような気がする。古代の人たちは当時一体どのようなコミュニケーションを行っていたのかも知りたいところである。

小林・澤村(2014:207)は、方言圏論を採用し、「中央語の言語的発想法が、歴史的に周囲に広まっていったと考えるのが自然」であり、「とりわけ東北は中央語の影響から取り残された」と主張している。再三繰り返してのことだが、小林・澤村(2014)で紹介されている意識調査や方言調査は、マスメディアが発達し、ラジオやテレビ、インターネットなど様々な媒体が網の目のように張り巡らされた1990年代以降におけるものも相当含まれている。東北地域といえども、ラジオやテレビ、インターネットなど瞬時にして情報を入手できる地域である。その地域がどのように「取り残され」ているのか、はたまた、いずれは「発達」して、「中央語」のように、言語による「配慮」がなされるような地域になるのだろうか。

また、一方で、「社会環境の近代化・都市化の遅れは、東北を文化的に一つの独立世界として放置した」(213ページ)と述べているが、「独立」世界の発想法とは何か。オノマトペや感動詞を例に挙げているが(これらも東北方言に結びつけられてよく語られるものだが)、音のレベルを中心とした「原始的」なものだけなのか。さらに、東北方言は、常に「ありのままの自分をさらけ出す」(212ページ)と述べているが、これは、2節であげたロマンティックな方言観そのものではないか。このような見方は、マスメディアで流通している言説とどこか通ずるものがあると思うのは私だけであろうか。

今回、方言敬語の語り方をみてきたが、小林・澤村(2014)では「発達」「未発達」が「価値の優劣ではない」としているが、どうしても近畿を中央・基準とみなし、東北を周縁・下位に位置づける語り方になっているのではないかとひっかかってしまうのである。そして、それがメディアで流通する東北、東北方言、東北方言話者に対するイメージとどこかで通底しているように感じるのである。つまり、オリエンタリズムの日本国内版ではないだろうか。

今回は先行研究をまとめることで、そもそも敬語とは何か、それが歴史的社会的にどのように構築され、機能してきたのかという根本的な問いが私自身につきつけられた気がする。今後も、引き続き、方言や敬語の語り方について、

より具体的に、そして体系的にみつめていきたい。

参考文献

- 飯豊毅一 (1969)「方言と敬語」『国文学 解釈と鑑賞』7月号臨時増刊号、至文堂、262-274
- 飯豊毅一 (1974)「敬語研究資料について」林四郎、南不二男編集『敬語講座10 敬語研究の方法』明治書院、99-140
- 池上禎造 (1973)「現代敬語の概観」林四郎、南不二男編集『敬語講座6 現代の敬語』明治書院、7-21
- 井上章一 (2018)『大阪的「おもろいおばはん」は、こうしてつくられた』幻冬舎新書
- 井上宏 (1995)「商売に育まれた「口の文化」と「横の笑い」」NHK大阪弁プロジェクト編『大阪弁の世界』経営書院、139-149
- 井上史雄 (1989)『言葉づかい新風景 (敬語と方言)』秋山書店
- 入谷敏男 (1973)「敬語と思考」林四郎、南不二男編集『敬語講座7 行動の中の敬語』明治書院、105-135
- 榎垣実 (1961)「西部方言の概説」東条操監修『方言学講座 第3巻 西部方言』東京堂、2-18
- 大石初太郎 (1974)「敬語の本質と現代敬語の展望」林四郎、南不二男編集『敬語講座1 敬語の体系』明治書院、7-46
- 大西拓一郎 (2016)『ことばの地理学 方言はなぜそこにあるのか』大修館書店
- 沖裕子 (2018)「長野県方言敬語の発想と表現—敬意終助詞が担う親しみと敬い—」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房、251-269
- 尾上圭介 (2010)『大阪ことば学』岩波現代文庫
- 加藤和夫 (1995)「隠れた方言コンプレックス」『言語別冊 変容する日本の方言』24-12、大修館書店、74-85
- 加藤淳 (2009)『東磐井の「原住民語」わがっぺが?』トーバン印刷
- 加藤正信 (1973)「全国方言の敬語概観」林四郎、南不二男編集『敬語講座6 現代の敬語』明治書院、25-83
- 加藤正信 (1985)「方言の現状と新しい方言学」加藤正信編『新しい方言研究 愛蔵版』至文堂、9-18
- 菅野宏 (1982)「福島県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言

- 学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、363-397
- 金田一京助 (1944)『言霊をめぐりて』八州書房
- 金田一京助 (1959)『日本の敬語』角川書店
- 熊谷滋子 (2017)「方言イメージが作り上げるドラマ」『ことば』38号、現代日本語研究会、11-28
- 熊谷滋子 (2018)「方言の価値が高まった」という言説を再考する」『人文論集』68号の2、静岡大学人文社会科学部、93-126
- Kumagai, Shigeko (2019) Tōhoku Dialect in NHK Morning Dramas: The Persistent Stigmatization of Tōhoku Dialect in Japanese Media,『人文論集』69号の2、静岡大学人文社会科学部、103-129
- 熊谷智子 (2018)「コミュニケーションの地域差の研究に向けて—試論—」小林隆編『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房、3-20
- 此島正年 (1982)「青森県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、213-236
- 此島正年 (1994)「青森方言の敬語法」井上史雄、篠崎晃一、小林隆、大西拓一郎『日本列島方言叢書② 東北方言考①東北一般、青森県』ゆまに書房、192-198
- 小林隆編 (2014)『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房
- 小林隆編 (2018)『コミュニケーションの方言学』ひつじ書房
- 小林隆・澤村美幸 (2014)『ものの言い方西東』岩波新書
- 小松代融一 (1961)「方言の実態と共通語化の問題点 4 岩手」東条操監修『方言学講座 第2巻 東部方言』東京堂、177-203
- 斎藤義七郎 (1982)「山形県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、297-331
- 佐藤亨 (1982)「宮城県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、333-361
- 佐藤稔 (1982)「秋田県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、271-295
- 司馬遼太郎 (1990)『街道をゆく27』朝日文庫
- 司馬遼太郎 (1993)『街道をゆく32』朝日文庫
- 祖父江孝男 (2018⁴⁴)『県民性 文化人類学的考察』中公新書
- 高津春繁 (1992)『比較言語学入門』岩波文庫

- 中井精一 (2014)「敬語意識とその説明体系の地域性」小林隆編『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房、291-316
- 野元菊雄 (1974)「敬語の研究—調査・分析の方法—」林四郎、南不二男編集『敬語講座10 敬語研究の方法』明治書院、39-98
- 芳賀綏 (1973)「敬語・態度・行為」林四郎、南不二男編集『敬語講座 7 行動の中の敬語』明治書院、67-104
- 日高水穂 (2014)「近畿地方の方言形成のダイナミズム 寄せては返す「波」の伝播」小林隆編『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房、245-264
- 藤原与一 (1956)「方言における敬語」『国文学 解釈と鑑賞』5月 至文堂、50-54
- 藤原与一 (1974)「敬語表現の原理」林四郎、南不二男編集『敬語講座 1 敬語の体系』明治書院、179-240
- 藤原与一 (1977)『方言学の方法』大修館書店
- 藤原与一 (1978)『方言敬語法の研究』春陽堂
- 本堂寛 (1964)「岩手県方言における敬語秩序についての一考察」『国語学研究 4』東北大学文学部、24-37
- 本堂寛 (1982)「岩手県の方言」飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編著『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会、237-269
- 彭飛 (1999)『大阪ことばと外国人』中公文庫
- 南不二男 (1973)「行動の中の敬語—敬語はことばだけとは限らない—」林四郎、南不二男編集『敬語講座 7 行動の中の敬語』明治書院、7-30
- 南不二男 (1974)「敬語研究の視点」林四郎、南不二男編集『敬語講座10 敬語研究の方法』明治書院、7-38
- 森下喜一 (1982)『岩手の方言』教育出版センター
- 安田敏朗 (1999)『〈国語〉と〈方言〉のあいだ—言語構築の政治学』人文書院
- 柳田国男 (2013⁹⁾『蝸牛考』岩波書店
- 山口幸洋 (1987)『静岡県の方言』静岡新聞社
- 吉岡泰夫 (1991)「言語行動における方言」徳川宗賢・真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社、48-67
- 吉岡泰夫 (2011)『コミュニケーションの社会言語学』大修館書店
- Said, Edward W. (1978) *Orientalism* New York: Vintage Books
- van Dijk, Teun A. (1993) *Elite Discourse and Racism* London: SAGE Publications